

## 〈世界〉を見る眼を養う ～前近代から現代へ～

### 1. はじめに

本校では高2・高3にて「論理国語」を必修科目として設置しているほか、選択科目の「現代文演習」を履修できるようにしている。現代文について、授業内容と試験・入試における設問の乖離は生徒や指導者にとって長年の課題といってよい。「論理国語」にて本文をじっくり咀嚼し、筆者の論理展開を追うトレーニングを行うことが重要であるのは言を俟たないが、一方でその応用としての演習もまた不可欠である。

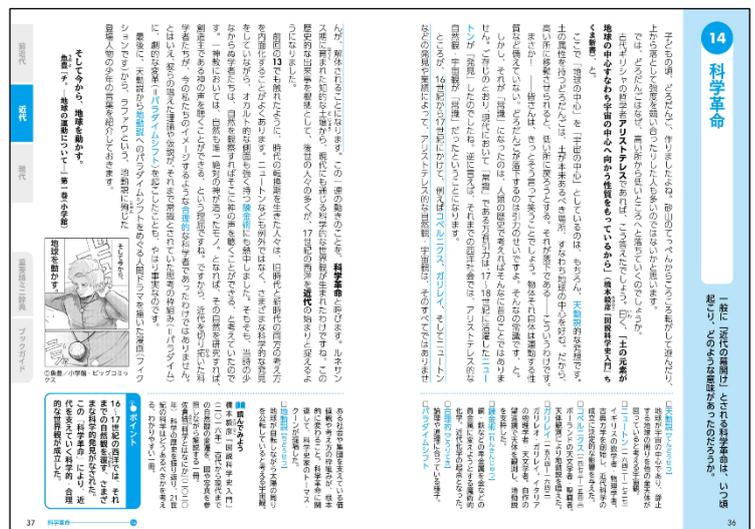
ただ本校では入試対策の演習科目を、試験会場という一点のみで通用する知識やテクニックを伝達するものではなく、大学やその後の人生における学びに接続させる場として捉えている。その意味で、どうしても読む絶対量が少なくなる「論理国語」に比して、テンポよく多様な文章・ジャンル・論者に触れられる演習科目には、〈世界〉を見る眼を多角的に養うことのできる『現代評論キーワード講義』(以下「本書」)の相性が非常によいといえる。



### 2. 本書の特徴

本書は既存の現代文単語帳とは明らかに一線を画す。そもそも、多くの単語帳に収録されている「近代」「ナショナリズム」などの語を、一回性の強い“点”としての〈単語〉と割り切ってしまうことに私は違和感を覚えてしまう。それらはむしろ〈概念〉として、“面”で、文脈で、重厚な解説文で理解していくほかにはないのではあるまいか。著者である小池陽慈先生はそうした概念習得観について非常に意識的であり、そして誠実であると思われる。

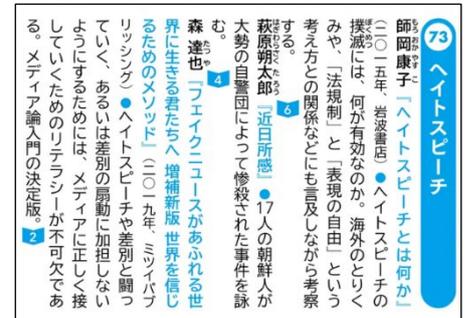
まず、100あるテーマについての著述が、読み物として非常に興味深い。文体は語りかけるような優しい口調でありながら、自分事として捉えやすい具体例で噛み砕く説明と、肝となる難解な概念を妥協せず複雑なまま理解してもらおうという部分のバランスが見事だ。各テーマの解説には『チ。—地球の運動について—』(「14 科学革命」)、『寄生獣』(「39 表象」)などの人気コンテンツの一節が援用されたり、「34 疎外」というテーマの具体例としてハンドバッグ職人の話題から筆を進めたりするなど、工夫が凝らされている。これは若い読者に迎合しているのでは全くなく、むしろ近代・現代思想は身近に親しむ文化や日常生活にこそ伏流しているとする著者の信念の表れなのだと思う。



本書 p36-37 「14 科学革命」紙面

加えて特筆すべきは、次の読書への理想的ないざないとなっている点であろう。これほどまでに学術的な入門書・専門書からの引用とその紹介を有機的に本文に取り込んだ学習参考書を、私は知らない。実際、本校の生徒にも本書の「ブックガイド」が志望学部選別に結び付いた者が複数名おり、広大な学問の沃野への入口として機能した。総合型選抜試験などのいわゆる年内入試が生徒個人の探究活動に重点を置く制度である以上、本書は一般入試の現代文に加えて、年内入試における生徒の関心事項を深掘りする一助ともなるのである。

入試会場で、大学での文献調査で、あるいは企業活動の必要に迫られて行う資料読解で、〈未知の概念〉に出会ってしまうと人は途端に混乱する。制限時間の明確な入試問題ではなおさらだろう。本書はそうした〈未知〉を減らし、「この語が出てきたのならこんな展開になるかな」といった〈概念へのデジャヴ〉を養ってくれる。だからこそ、受験生のみならず大学生や学び直しを切望する社会人にも、ぜひ本書の語りに耳を傾けてほしい。他の書籍や報道を通じて見える〈世界〉が広がっていくはずである。



巻末「ブックガイド」  
実際に生徒の志望学部選びや  
総合型選抜試験対策の参考になった。

### 3. 実際の活用方法

※問題演習で使用するテキスト（以下「演習冊子」）は他社の1回完結型問題集を使用。

- ① 初回の授業にて、本書の「目次」を全員で確認。気になるテーマについて、2~3項を読む時間をとる。
- ② 読み物として「すきま時間」などにどんどん読み進めるよう指示。学校図書館と連携し、紹介されている書籍は優先的に購入してもらうよう依頼する。
- ③ 演習冊子の解答が終わり次第、その文章と関連するテーマを本書から探して読み込むよう指示。一見して見つからなければ、文章とつながっていきそうなテーマを選ばせ、発表させる。
- ④ 文章に関連するテーマ、もしくは生徒が発表したテーマについて、本書の内容を全員で熟読。そこから派生してページを移動することもままある。たとえば近年入試問題にも頻出の「99 ケアの倫理」は、「16 主客二元論」「32 資本主義」「69 ジェンダー」などと密接に関連している。
- ⑤ 定期試験では演習冊子に関連した読解問題のほか、本書を用いて範囲とするテーマの青字および黒太字の語句を選択式で解答する問題を出題する。ただし、これはあくまで本書を読み込むことを目的とした取り組みであり、語句の暗記が自己目的化してはいけなく重ねて指導する。なお、採択校は本文データの提供を受けられる。
- ⑥ 自学として入試過去問や演習問題に取り組む際も、理解が曖昧な概念があれば必ず本書で補強するよう指示。

二 次の文章群について、空欄【A】～【O】に当てはまる語句として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

軍曹は「涙をこぼし歯ををし」ながら、怒りを爆発させています。同じ日本兵という以外に接点のない、見も知らぬ人々が惨殺されたことに、【A】にも似た感情を抱く——このような【B】は、メディアや教育などを通じて日本人が国民として統合され、一生出会うこともないような人間同士の間で「同じ日本人」としての仲間意識が想像され、共有される。そうした前提がなければ生じるはずがありません。ナショナルリズムの【C】となるようなこうした同胞観念について、アメリカの政治学者ベンディクト・アンダーソンは、次のように述べています。「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」。

方言札というものを知っていますか。国民に共通の言語や文化を【D】する場、すなわち国民統合の【E】としての学校などにおいて、方言や日本語ではない母語を話した生徒が、罰として首にかけさせられた札です。人間の尊厳を蹂躪する、許しがたい行いではないでしょうか。

「労働者は自らの労働力を商品として資本家に売る」という資本主義経済のしくみから考えると、資本家は、本来この少年に支払うべき、労働力という商品への対価＝賃金を、くすねていることになる。つまりこの事例で【F】化しているのは、労働者が本来手にするべき利益が、資本家によって不当に奪われる——すなわち【G】されるという、資本主義においてしばしば指摘される問題なのです。

ハンドバッグを製造する工場の職人のドキュメンタリーを見たことがあります。皮革という一筋縄ではいかない素材を相手に、自らの経験に裏打ちされた技術や勘をもって、一つひとつ、手で丁寧に仕上げている。職人の目は、【H】にあふれて輝いて見えました。

しかし、このような前近代的な作り方は、今ではめずらしい。まず、これでは多くの数を生産することはできません。いきおい、値段も高価になる。となると、あまり売れない、つまりもうからない。冒頭の事例はさておき、こうした仕事のしかたを非合理的だと考えた近代の資本主義経済においては、【I】体制に基づく大量生産が基本となりました。

「われわれは、何千年もあいだこの地でおこなわれてきたもともとも残忍な圧政と戦っているのだ。」上はポール・アダムという作家の、「未知の町」という本の一節だそうです。アフリカ植民地軍のフランス人士官の言葉として紹介されています。「何千年もあいだ」つまり「ずっと変わらず」という言い方に、植民地を「未開」と【J】するまなざしが見てとれます。対して自分たちは、「文明」を体現する人間である。よって未開の状態にある原住民たちを、理性的な存在へと導いていかなければならない。そのためには、植民地支配もやむなし。【K】思想や社会進化論などが、植民地主義の暴力を正当化していることがわかります。

ここで、前回の39「表象」について、補足しなければいけないことがあります。それは、再現・表現・代弁……など、表象をどのような意味で用いようと、表象される対象とその表象との間には、ズレ、時には大きな【L】が生じるということです。とりわけ、表象する側（主体）が強者であり、へ表象される側（客体）が弱者である場合、後者について、侮蔑的で差別的なイメージが【M】されやすい。フアンは、マジョリティが作り上げた自分たちについての負のステレオタイプは「作り物にすぎない」と断言しています。

近代西洋における東方への興味関心は、その実、自分たち西洋の「優越」したアイデンティティを確立したいという欲望に突き動かされたものでした。そして、このような意味での【N】という語は、より広い文脈で用いられるようになります。すなわち、西洋に限らず、「他文化についてネガティブなステレオタイプを構築することで、自文化の優位性を幻想するという自己形成のありかた」一般を意味する概念へと【O】されるのです。もちろんそれは、自らの属する文化や集団の優越性を強く意識し、他の文化や集団を劣ったものとみなす、【P】（「自民族中心主義」と運動する）【O】です。

ア 顕在	イ 凌駕	ウ 蔑視	エ 母胎	オ 迎合
カ 分業	キ 敷衍	ク 義憤	ケ 捏造	コ 搾取
サ 惨憺	シ 啓蒙	ス 教化	セ 矜持	ソ 懸隔
タ 装置	チ 拙速	ツ 情動	テ 豊穡	ト 教祖
ナ キヤビタリズム	ニ オリエンタリズム	ヌ エソノセントリズム	ネ ステークホルダー	ノ イデオロギー

⑤で紹介した定期試験での出題例

このように、本書を切り取ったうえで単純な穴埋め問題として使用することには、脱文脈的であるといったさまざまな批判もあろう。しかし上記でも言及したように、この出題の目的は試験を活用して本書を深く読み込み、その内容全般に触れさせることである。そのため試験前の授業では、本文の青字および黒太字の部分にマーカーを引き、赤シートで隠して覚えるといったやり方を極力たしなめるようにしている。なお、1回の試験につき、範囲は15テーマほどを指定している。1年間の試験だけではすべてをカバーしきれないので、生徒の自学に任せるほかないが、本書の内容および本書を授業で用いることには生徒も大きな手ごたえを感じているようである。

執筆者プロフィール



村上 敦貴（むらかみ たいき）  
川村中学校・高等学校 国語科主任

2023年度着任。今年度は高校3年生の学年担当として進路指導と教務を担当している。  
おすすめ本は岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』、荒井裕樹『まとまらない言葉を生きる』（どちらも本書「ブックガイド」に収載）。